

1 水稻

病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠
葉いもち	やや早い 全般発生期 7月第3半旬 (7/11~7/15)	平年並	<ul style="list-style-type: none"> ・巡回調査の結果、本田での発生は確認されなかった。定点調査ほの初発は6月27日(ひとめぼれ)で、平年より早かった。(±~-/±) ・アメダス資料では、7月上旬に感染好適条件の広域出現日が連続しており、感染しやすい状況が続いた。(±~-/±~+) ・平均気温が20~25℃、曇りや雨が多いことが発生に好適であり、向こう1か月の気温はほぼ平年並(/±)、降水量は平年並か多い(/±~+)、日照時間は平年並か少ない(/±~+)と予報されている。
紋枯病	—	やや多	<ul style="list-style-type: none"> ・前年の発生量が平年並であったことから、伝染源量は平年並と推測される。(/±) ・巡回調査の結果、発生株率及び発生地点率は平年より高かった。(/+) ・高温多湿が発生に好適であり、向こう1か月の気温はほぼ平年並(/±)、降水量は平年並か多い(/±~+)と予報とされている。
稻こうじ病	—	平年並	<ul style="list-style-type: none"> ・前年の発生量が平年よりやや少なかったことから、伝染源量は平年よりやや少ないと推測される。(/-) ・穂ばらみ期が低温で、降雨日数の多いことが発生に好適であり、向こう1か月の気温はほぼ平年並(/±)、降水量は平年並か多い(/±~+)と予報されている。
斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ)	平年並 第1世代成虫 発生盛期 7月第4半旬 (7/16~7/20)	平年並	<ul style="list-style-type: none"> ・定点調査の結果、牧草地におけるアカスジカスミカメ越冬世代成虫の発生盛期は、平年よりやや遅い6月第6半旬であった。(+/) ・向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている。(±/) ・巡回調査の結果、水田周辺の畦畔、牧草地及び雑草地におけるアカスジカスミカメ成虫のすくい取り虫数は平年並であった。(/±)
コバネイナゴ	やや早い 侵入盛期 7月第2半旬 (7/6~7/10)	多	<ul style="list-style-type: none"> ・巡回調査の結果、発生地点率は平年より高く、すくい取り虫数は平年より多かった。(/+) ・定点調査(本田)における幼虫の齢構成は3齢を主体に2~4齢が確認されており、平年よりやや早いと推測される。(-/)

2 りんご

病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠
斑点落葉病	—	やや多	<ul style="list-style-type: none"> ・巡回調査の結果、新梢葉における発生地点率は平年より低く、発病葉率も平年よりやや低かったが、徒長枝における発生地点率は平年よりやや高かった（ /－,＋）。 ・7月上旬は降雨日が多く、感染しやすい状況が続いた。（ /＋）。 ・高温多湿が発生に好適であり、向こう1か月の気温はほぼ平年並（ /±）、降水量は平年並か多い（ /±～＋）と予報されている。
ハダニ類	—	やや少	<ul style="list-style-type: none"> ・巡回調査の結果、寄生は確認されなかった。（ /－） ・高温乾燥が発生に好適であり、向こう1か月の気温はほぼ平年並（ /±）、降水量は平年並か多い（ /±～－）と予報されている。
アブラムシ類	—	やや少	<ul style="list-style-type: none"> ・巡回調査の結果、発生量はほぼ平年並であった。（ /±） ・少雨が発生に好適であり、向こう1か月の降水量は平年並か多い（ /±～－）と予報されている。

3 なし

病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠
黒星病	—	やや多	<ul style="list-style-type: none"> ・巡回調査の結果、新梢における発生地点率、発病葉率ともに平年並であったが、果実における発生地点率は平年よりやや高かった。（ /±～＋） ・7月上旬は降雨日が多く、感染しやすい状況が続いた。（ /＋）。 ・気温 20℃前後で多湿が発生に好適であり、向こう1か月の気温はほぼ平年並（ /±）、降水量は平年並か多い（ /±～＋）と予報されている。
ハダニ類	—	やや少	<ul style="list-style-type: none"> ・巡回調査の結果、発生地点率、1葉当たりの寄生頭数ともに平年よりやや少なかった。（ /－） ・高温乾燥が発生に好適であり、向こう1か月の気温はほぼ平年並（ /±）、降水量は平年並か多い（ /±～－）と予報されている。
アブラムシ類	—	やや少	<ul style="list-style-type: none"> ・巡回調査の結果、発生は確認されなかった。（ /－） ・少雨が発生に好適であり、向こう1か月の降水量は平年並か多い（ /±～－）と予報されている。

※予報の根拠（発生時期 / 発生量）

発生時期・・・(+)：遅くなる要因 (±)：平年並になる要因 (－)：早くなる要因 (空欄)：該当せず
発生量・・・(+)：多くなる要因 (±)：平年並になる要因 (－)：少くなる要因 (空欄)：該当せず

より詳しい内容は、次のページよりご確認ください。

次回、発生予報第7号の発行日は、7月22日(水)の予定です。

ー7月下旬までの発生予報と防除のポイントー

巡回調査:6月30日～7月3日

定点調査ほ:大崎市古川(古川農業試験場)

天候予報:仙台管区气象台7月9日発表

1 発生予報

病害虫名	発生時期 (全般発生期)	発生量
葉いもち	やや早い (7月第3半旬:7/11～7/15)	平年並

予報の根拠

- (1)巡回調査の結果、本田での発生は確認されなかった。定点調査ほの初発は6月27日(ひとめぼれ)で、平年より早かった。
- (2)アメダス資料では、7月上旬に感染好適条件の広域出現日が連続しており、感染しやすい状況が続いた。
- (3)平均気温が20～25℃、曇りや雨が多いことが発生に好適であり、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多い、日照時間は平年並か少ないと予報されている。

病害虫名	発生時期	発生量
紋枯病	ー	やや多

予報の根拠

- (1)前年の発生量が平年並であったことから、伝染源量は平年並と推測される。
- (2)巡回調査の結果、発生株率及び発生地点率は平年より高かった。
- (3)高温多湿が発生に好適であり、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報とされている。

病害虫名	発生時期	発生量
稲こうじ病	ー	平年並

予報の根拠

- (1)前年の発生量が平年よりやや少なかったことから、伝染源量は平年よりやや少ないと推測される。
- (2)穂ばらみ期が低温で、降雨日数の多いことが発生に好適であり、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている。

病害虫名	発生時期 (第1世代成虫発生盛期)	発生量
斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ)	平年並 (7月第4半旬:7/16~7/20)	平年並

予報の根拠

- (1) 定点調査の結果、牧草地におけるアカスジカスミカメ越冬世代成虫の発生盛期は、平年よりやや遅い6月第6半旬であった。
- (2) 向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている。
- (3) 巡回調査の結果、水田周辺の畦畔、牧草地及び雑草地におけるアカスジカスミカメ成虫のすくい取り虫数は平年並であった。

病害虫名	発生時期 (侵入盛期)	発生量
コバネイナゴ	やや早い (7月第2半旬:7/6~7/10)	多

予報の根拠

- (1) 巡回調査の結果、発生地点率は平年より高く、すくい取り虫数は平年より多かった。
- (2) 定点調査(本田)における幼虫の齢構成は3齢を主体に2~4齢が確認されており、平年よりやや早いと推測される。

2 防除のポイント

(1) 共通事項

- ・薬剤抵抗性の発達防止のため、同一作用機構分類に属する剤の連用を避け、計画的にローテーションを組む。

(参考:農薬工業会ホームページ 農薬の作用機構分類 <https://www.jcpa.or.jp/lab/mecanism.html>)

(2) 葉いもち

- ・箱施用剤や予防粒剤の効果が低下し始めるとともに、葉いもちの感染好適条件となりやすい時期である。また、日照不足や追肥後は、稲体の窒素濃度が高まり、いもち病菌に対する抵抗力が低下して感染しやすくなる。

- ・ほ場を入念に見回り、発生を確認した場合は、直ちに茎葉散布剤で防除する。

※BLASTAM(ブラスタム)による葉いもちの感染好適条件の推定結果は、次のサイトをご覧ください。
<https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/byogai/blastam.html>

(3) 穂いもち

- ・予防粒剤は出穂 30~5日前に使用する剤が多いので、生育状況をよく観察し、出穂期の予測に基づき適期に散布する。

(4) 紋枯病

- ・出穂期前からの発病は被害が大きくなるので、発生に注意する。
- ・茎葉散布剤の散布適期は穂ばらみ期から穂揃期である。要防除水準(収量の減収率が5%以上、被害発生確率 50%の場合)は、穂ばらみ期の発病株率が「ひとめぼれ」では 18%となっているので、要防除水準を参考に防除を実施する。

※他品種や異なる減収率における要防除水準は、普及に移す技術第 90 号参考資料 15「イネ紋枯病の新しい要防除水準」をご覧ください。 <https://www.pref.miyagi.jp/uploaded/attachment/305990.pdf>

- ・前年に発生が多かったほ場では多発のおそれがあるので防除を実施する。
- ・株元に薬剤(液剤, 水和剤, 粉剤)がよく付着するよう十分な薬量で散布する。

(5) 稲こうじ病

- ・前年に多発したほ場では注意が必要である。銅剤は予防効果が高く効果的なので、適期(出穂 20～10 日前)に防除を実施する。
- ・窒素肥料を多く施用すると発生を助長することがあるため、追肥の際は注意する。

(6) 斑点米カメムシ類

- ・防除情報第2号(7月 10 日発行)を参照。

(7) コバネイナゴ

- ・防除情報第1号(7月7日発行)を参照。

－ 農薬の適正使用について－

- 1 ラベルに記載されている適用作物, 使用時期, 使用方法等を十分に確認する。特に, 水田用除草剤や水田で粒剤を使用する場合は, 止水に関する注意事項を確認する。
- 2 ラベルの注意事項にある「注意喚起マーク」の表示に従い, 適切な保護具を着用する。
- 3 農薬の使用前後には, 防除器具を点検し, 十分に洗浄されているか確認する。
- 4 近隣住民等に散布スケジュールを事前に周知し, 周辺環境への飛散防止に努める。
- 5 農薬は計画的に購入・使用し, 使い切るよう努める。
- 6 散布後には農薬の使用履歴を記帳する。

※薬剤の選定に当たっては, 最新の農薬登録情報を確認してください。

独立行政法人農林水産消費安全技術センターのトップページ: <http://www.famic.go.jp/>

《お問い合わせ先》

宮城県病害虫防除所

〒981-0914 仙台市青葉区堤通雨宮町4-17

TEL:022-275-8982 FAX:022-276-0429 E-mail: byogai@pref.miyagi.lg.jp

農薬危害防止運動実施中！(6月1日～8月31日まで)

ー8月上旬までの発生予報と防除のポイントー

巡回調査は:6月30日～7月2日

定点調査:名取市高館(農業・園芸総合研究所)

天候予報:仙台管区気象台7月9日発表

1 発生予報

病害虫名	発生時期	発生量
斑点落葉病	ー	やや多

予報の根拠

- (1)巡回調査の結果、新梢葉における発生地点率は平年より低く、発病葉率も平年よりやや低かったが、徒長枝における発生地点率は平年よりやや高かった。
- (2)7月上旬は降雨日が多く、感染しやすい状況が続いた。
- (3)高温多湿が発生に好適であり、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている。

病害虫名	発生時期	発生量
ハダニ類	ー	やや少

予報の根拠

- (1)巡回調査の結果、寄生は確認されなかった。
- (2)高温乾燥が発生に好適であり、向こう1か月の気温はほぼ平年並、降水量は平年並か多いと予報されている。

病害虫名	発生時期	発生量
アブラムシ類	ー	やや少

予報の根拠

- (1)巡回調査の結果、発生量は平年並であった。
- (2)少雨が発生に好適であり、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている。

2 防除のポイント

(1)斑点落葉病

- ・薬剤防除の際は、発病した徒長枝を取り除いてほ場内の伝染源を減らし、散布ムラのないよう十分量の薬液を散布する。
- ・最低気温が20℃以上で3日以上降雨が続くと急増する傾向がある。今後の発生に注意するとともに、曇雨天が続く場合は、散布間隔が開かないよう薬剤散布を行う。

(2)黒星病

- ・発生が散見されている。気温が低く、降雨日が多いと発生が多くなるので、園内をこまめに見回り、発病葉を見つけた場合は、摘み取って園外に持ち出し適切に処分する。

(3)輪紋病

- ・果実への感染は6月中旬から8月上旬の降雨の多い時に起こるため、いぼ皮病斑の多い園地では、枝幹部にも十分薬液がかかるよう予防防除を実施する。特に梅雨時期は、散布間隔が開かないよう注意する。

(4)ハダニ類

- ・園地を見回り、ハダニ類が1葉当たり3頭以上寄生している場合には、防除を実施する。
- ・ハダニ類は、園内に生息しているもののほか、周辺から移動してきて加害することもある。隣接地の他作物や雑草における発生にも十分注意し、園地内の雑草管理を適切に行う。

(5)アブラムシ類

- ・発生の多い園地では、他の害虫の発生状況も考慮して薬剤を選定して防除する。
- ・薬剤防除を行う場合は、枝の先端まで薬剤が行き渡るように散布する。

(6)モモシクイガ

- ・産卵場所となりやすい、がくあ部(果頂部)を観察して産卵期を見極め、産卵盛期に防除する。
- ・被害果(園地周辺のモモ、ウメ、スモモ等も含む)は、次世代の発生源となる場合があるので、見つけ次第取り除き、水漬けする等して適切に処分する。

(7)キンモンホソガ

- ・発生の多い園地では、蛹から羽化する時期を見極めて、適期(成虫～卵の時期)に防除する。
- ・第1世代以降の成虫は、新梢葉を主体に産卵するため、ほ場内をよく観察し、適切な防除を行う。

－農薬の適正使用について－

- 1 ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を十分に確認する。
- 2 ラベルの注意事項にある「注意喚起マーク」の表示に従い、適切な保護具を着用する。
- 3 農薬の使用前後には、防除器具を点検し、十分に洗浄されているか確認する。
- 4 近隣住民等に散布スケジュールを事前に周知し、周辺環境への飛散防止に努める。
- 5 農薬は計画的に購入・使用し、使い切るよう努める。
- 6 散布後には農薬の使用履歴を記帳する。

※薬剤の選定に当たっては、最新の農薬登録情報を確認してください。

独立行政法人農林水産消費安全技術センターのトップページ:<http://www.famic.go.jp/>

《お問い合わせ先》

宮城県病虫害防除所

〒981-0914 仙台市青葉区堤通雨宮町4-17

TEL:022-275-8982 FAX:022-276-0429 E-mail:byogai@pref.miyagi.lg.jp

農薬危害防止運動実施中！(6月1日～8月31日まで)

ー8月上旬までの発生予報と防除のポイントー

巡回調査:6月30日,7月2~3日

定点調査ほ:名取市高館(農業・園芸総合研究所)

天候予報:仙台管区气象台7月9日発表

1 発生予報

病害虫名	発生時期	発生量
黒星病	ー	やや多

予報の根拠

- (1)巡回調査の結果,新梢における発生地点率,発病葉率ともに平年並であったが,果実における発生地点率は平年よりやや高かった。
- (2)7月上旬は降雨日が多く,感染しやすい状況が続いた。
- (3)気温20℃前後で多湿が発生に好適であり,向こう1か月の気温はほぼ平年並,降水量は平年並か多いと予報されている。

病害虫名	発生時期	発生量
ハダニ類	ー	やや少

予報の根拠

- (1)巡回調査の結果,発生地点率,1葉当たりの寄生頭数ともに平年よりやや少なかった。
- (2)高温乾燥が発生に好適であり,向こう1か月の気温はほぼ平年並,降水量は平年並か多いと予報されている。

病害虫名	発生時期	発生量
アブラムシ類	ー	やや少

予報の根拠

- (1)巡回調査の結果,発生は確認されなかった。
- (2)少雨が発生に好適であり,向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている。

2 防除のポイント

(1)黒星病

- ・本病は感染から発病までの潜伏期間が14~30日であり,まとまった降雨の後しばらく経過してから,急に症状が現れることがある。今後の発生に注意するとともに,防除間隔が開かないよう定期的な予防防除を実施する。
- ・薬剤耐性菌対策のため,FRACコードが同じ薬剤の連用を避け,計画的にローテーションする。本県では現在までDMI剤(FRACコード*:3),QoI剤(FRACコード:11),SDHI剤(FRACコード:7)の耐性菌は確認されていないが,これらの混合剤を含めた使用はそれぞれ年2回以内とする。

※FRACコード:殺菌剤の有効成分を作用機構別にグループ分けし,アルファベットまたは数字で表したもの。
エフラック

(参考:農業工業会ホームページ 農業の作用機構分類 <https://www.jcpa.or.jp/labo/mechanism.html>)

- ・発病部位は伝染源となるので、見つけ次第除去し、園外へ持ち出して土中に埋めるなど適切に処分する。
- ・不要な徒長枝を取り除き、薬剤が樹木全体に行き渡るように管理する。
- ・「幸水」は果実肥大後期でも黒星病に感染しやすいため、特に注意する。

(2)ハダニ類

- ・ハダニ類は、下草や周辺の雑草等から移動し加害することもあるので、周辺の発生状況に注意するとともに、園地内の適切な雑草管理を実施する。
- ・一部殺ダニ剤で効果が低下している事例があるので、寄生種をよく確認して薬剤を選定し、散布後の状況をよく観察する。

(3)アブラムシ類

- ・発生が多い園地では、他の害虫の発生状況も考慮して薬剤を選定して防除する。
- ・薬剤防除を行う場合は、枝の先端まで薬剤が行き渡るように散布する。

－農薬の適正使用について－

- 1 ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を十分に確認する。
- 2 ラベルの注意事項にある「注意喚起マーク」の表示に従い、適切な保護具を着用する。
- 3 農薬の使用前後には、防除器具を点検し、十分に洗浄されているか確認する。
- 4 近隣住民等に散布スケジュールを事前に周知し、周辺環境への飛散防止に努める。
- 5 農薬は計画的に購入・使用し、使い切るよう努める。
- 6 散布後には農薬の使用履歴を記帳する。

※薬剤の選定に当たっては、最新の農薬登録情報を確認してください。

独立行政法人農林水産消費安全技術センターのトップページ：<http://www.famic.go.jp/>

《お問い合わせ先》

宮城県病害虫防除所

〒981-0914 仙台市青葉区堤通雨宮町4-17

TEL:022-275-8982 FAX:022-276-0429 E-mail:byogai@pref.miyagi.lg.jp

農薬危害防止運動実施中！

宮城県では、6月1日から8月31日を農薬危害防止運動実施期間と定め、農薬の安全・適正使用を推進しています。農薬による事故を未然に防ぎ、消費者の皆さんに安全・安心な農作物を届けるため、農薬は適正に使用しましょう。

- ✓ 使用・販売する農薬の農薬登録を確認しましょう
- ✓ 農薬容器のラベルをよく読みましょう
- ✓ 周辺環境や近隣住民に配慮しましょう
- ✓ 土壌くん蒸剤(クロルピクリン剤等)の取扱いに注意しましょう
- ✓ 農薬散布作業中・作業後の事故に注意しましょう
- ✓ 農薬の容器を移し替えたりせず、鍵のかかる場所に保管しましょう